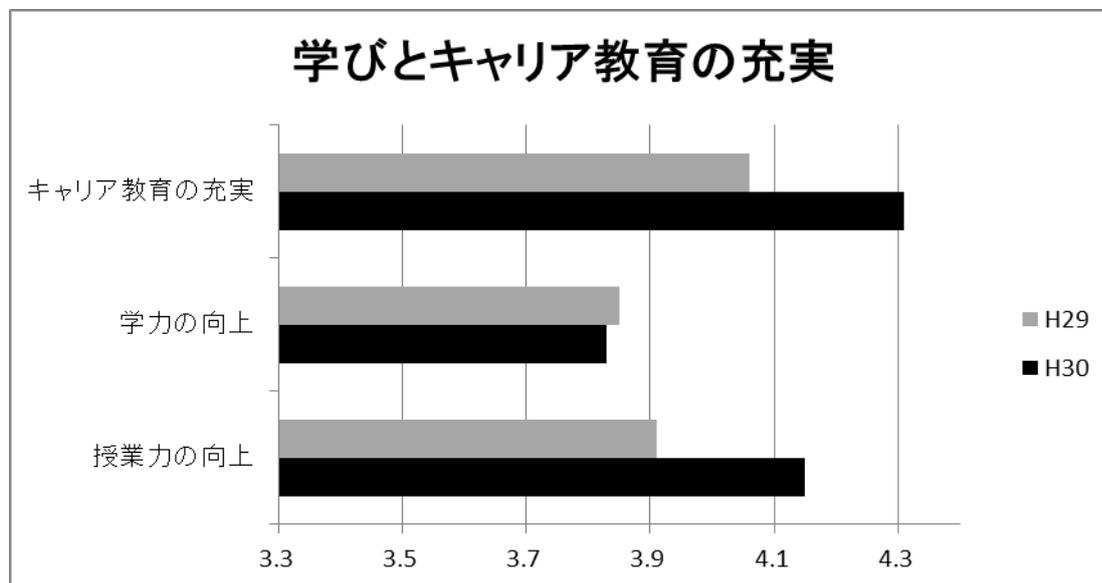


## 平成30年度 有馬高等学校 学校評価

— 「自己評価」結果報告と分析・考察等 —

## 重点目標 1



## 【自己評価の分析・考察および今後の改善策】

## 〈総合学科部〉

「産業社会と人間」を中心とした生き方を考える授業の中で、人生のキャリアデザインを主体的に考え、コミュニケーション能力を向上させることを目標とした取組を実践している。今年度も上級学校訪問や職業人インタビュー、インタビュー講座やスピーチ講座等、多方面からの協力を得て生徒たちの成長を感じることができた。

より効果的な授業を目指して毎年改訂を加えているが、次期学習指導要領改訂に向けて、「これからの時代に求められる力」を考え、論理的に自分の考えを発信する授業を実践していきたい。

## 〈農業部〉

今年度も外部と連携したキャリア教育を積極的に実践したことを評価いただいた。特にバスセミナーでは農産物直売所の見学、研修を新たに取り入れ、地元兵庫県、三田市への思いが高まる内容となった。このような多様な進路指導の結果、今年度人と自然科の生徒 39 名の進路先として、過去最大の 7 名が兵庫県立農業大学校へ進学、さらに地元 JA に 2 名、兵庫県職員（農学職）にも 1 名就職が内定するなど地元志向が強まった。また国公立大学にも 2 名が合格し、生徒が目標とする進路を実現できた。今後の課題としては国や県も施策として取り組んでいる、新規就農者を増やす進路指導を関係機関と連携し実施したい。

## 〈進路指導部〉

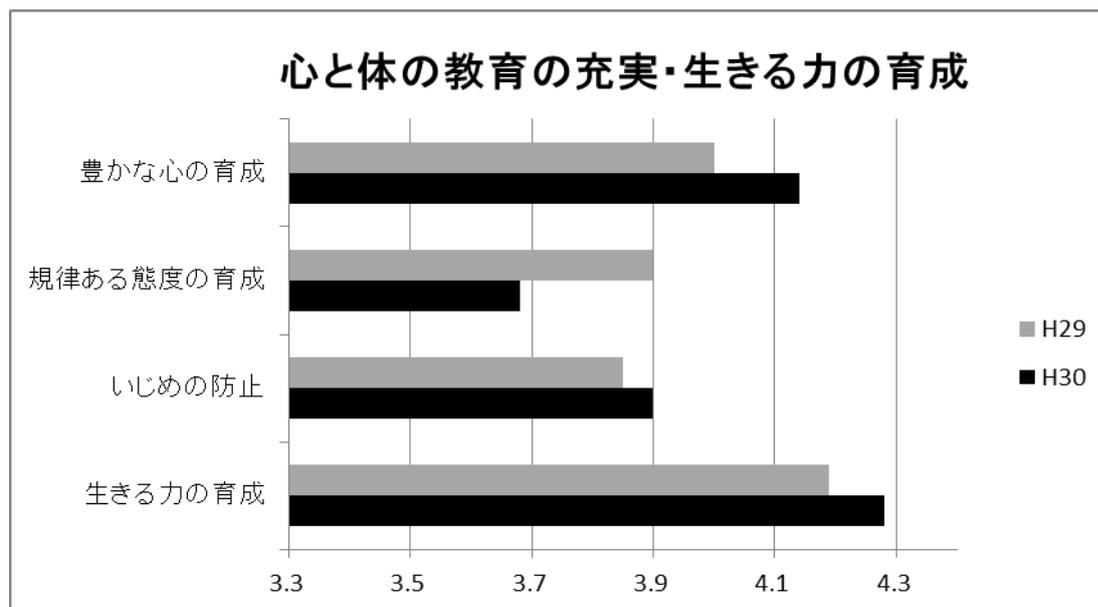
台風の影響で大学別入試説明会ができなかったが、進路講演会や各ガイダンスは予定通り実施できた。元予備校講師による「国公立・難関私大講座」は多くの参加があり進路意識の高さがうかがえた。推薦入試対策として今年度も外部講師を活用した「看護医療面接講座」を実施し、その効果もあって好調だった前年度よりもさらに良い評価結果が得られた。

課題としては推薦入試の志望理由書の内容が浅い生徒が多く見られたので、ガイダンスで書き方を徹底するとともに、そもそもの大学選びについては学びの内容をしっかりと考えさせる視点で指導していきたい。

### 【資料3】

〈教務部〉（学力向上委員会・教育課程委員会）

授業力の向上を目指した年2回の公開授業週間では、研究授業を中心に教科内外を問わず意見の交換ができていたと思われる。今後は研究授業以外でも活発な意見が交換できる状況を目指したい。教育課程については、平成31年度入学生より総合学科は家庭科と商業科で、生徒の関心の高さや、分野のバランスを考えて新たに科目を配置した。また人と自然科は一部演習科目の内容を変更した。生徒のニーズが多様化する中で、今後も様々な観点からバランスよく科目配置する必要がある。更に今後はクラス減に伴う生徒数の減少も予想され、個々の進路や興味関心に対して教育課程上すべてに対応することが困難になっていく中での措置も今後は必要となる。



#### 【自己評価の分析・考察および今後の改善策】

##### 〈生徒指導部〉

目標を明確化にし、目標到達度は生徒が意識できるように設定し、規律ある態度を育成していくことが課題である。具体的には遅刻の減少に力をいれていきたい。

委員会活動等活動が定着してきている。しかし、常置委員会の意義等を共通理解し、さらに活動を活性化させていきたい。

いじめ認知件数は一件言葉による暴力である。生徒には言動について気づきを促し、日頃から教員のアンテナの感度を上げ、些細な変化をも共有できる体制を維持していきたい。

##### 〈総務・広報部〉（人権教育・国際理解教育）

人権教育の取組については、年間計画に沿って職員研修や人権 HR 等が実施され、自己評価結果 4.3 という高い評価を得た。新教育課程に向けて、段階的に移行できるよう、校内委員会との連携が更に必要である。

国際理解教育に係る評価が昨年と比べ 3.9 から 4.1 へと 0.2 ポイント上昇したのは、オーストラリア短期研修参加者数及び受け入れ人数が、昨年度のマレーシア短期研修参加者数及び受け入れ人数を大きく上回り、より多くの人々が交流の機会を持てたことが一因であると考えられる。来年度の交流はマレーシアであり、募集人数が少ないため短期研修参加者、受け入れ人数の数は今年度より少なくなるが、大切な学校行事として周知し、多くの職員で関わっていただけるようにしたい。

##### 〈保健相談部〉

キャンパスカウンセラーの 2 名体制が維持され、有効に活用できた。難しい事例にカウンセラーの協力を得て対応することができた。

年 2 回の職員研修会を実施し、職員の面談力を高める内容を工夫した。今後も質の高い研修会を計画し、またその成果も評価していくことが課題である。

定期的に情報交換会が設定され、各部署が意見交換することで視野が広がり、問題解決の糸口に近づくことが期待できると考える。今後も早期から校内組織が連携し、生徒の心を育てる対応を検討していく必要がある。

## 【資料3】

### 〈教務部〉

授業を行う上で、生徒の授業の取り組み姿勢も大きな問題はなく、まじめに学習できるようになっている。規範意識を持った集団として学習する環境が整ってきている中で、今後は自ら計画的にかつ主体的な姿勢で学習に向かうことができるかという点が大きな目標である。受身的な学習姿勢から脱却し、自らの進路に照らし合わせて学習計画を立て、意欲的に学習に向かう姿勢を持たせたい。

### 〈生徒指導部・学年〉

規律ある態度の育成に関しては、学年と情報共有をさらに深めるとともに、新学期当初、各考查期間前後、長期の休み明け、等の生徒が不安定になりやすい期間に対する生徒指導体制を明確にする。さらに学校行事や各種の委員会活動を通じて集団の一員としての自覚や自信をはぐくみ、互いに認めあえる人間関係づくりが必要である。

### 〈いじめ対策委員会〉

いじめの認知件数は少なかったが、「いじり」について考える機会を持つ必要があるのではないか。いじめ防止はもちろんのこと生徒情報や生徒の変化について特定の職員が抱え込むことなく、学校として共通理解を図るという認識を教職員がもつことが最優先であり、組織として対応していく体制づくりが課題である。

### 〈農業部〉

外部と連携したセミナーや販売実習、地域貢献活動を取り入れた授業実践、農業クラブを中心とした交流活動に高い評価をいただいたと推測する。文部科学省や県教育委員会も重点実践事項として挙げている、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業が様々な場面で実践できたと考える。今後の課題としては実習授業などを中心に教師主導型から先輩が後輩を指導する生徒主導型の授業展開に取り組みたい。また、現在行われている人博連携セミナーやありまふじ公開セミナー、地域の方々を受講生としてお招きするチャレンジ教室などの外部連携授業を持続可能な取組にする必要がある。

### 〈総合学科部〉

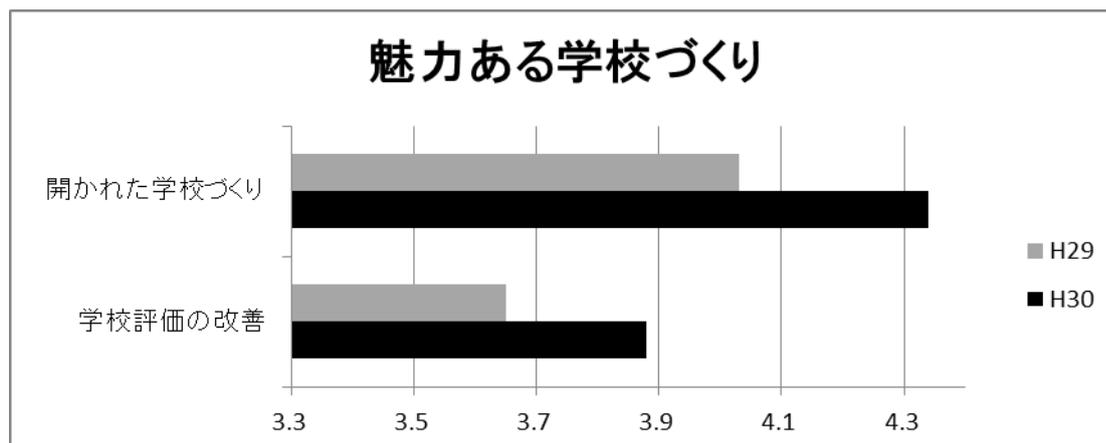
「産業社会と人間」を中心とした生き方を考える授業の中で、コミュニケーション能力を向上させる取組や各種発表会といった授業実践を通して、多くの生徒が主体的に行動する力を伸ばしている。学年が上がるほど、経験や責任感も増し、授業や行事が「自主的な学びの場」となり、「生きる力」につながっていると考えている。

自分の手で未来を切り開いていく力を身につけることができるよう、「自分で考え行動する」態度を育てていく工夫を今後も更に重ねていきたい。

### 〈進路指導部〉

進路指導部では、3学年就職希望者に対し、各自の適性に合った就職先を選択できるように、面談と企業説明・企業見学に力を入れて取り組んだ。内定後も就職講座を継続的に実施し、「ビジネスマナー講座」「キャリアシミュレーションプログラム」「卒業生講話」などの社会人講座や学校行事の受付を担当するなど、実践的な社会体験の機会を増やすことで入社への準備を進めている。1・2学年に対しては、総合学科・人と自然科の両学科と協力し、体系的なキャリア教育の構築を目指したいと考えている。インターンシップを見直し、指導体制の整備を進めていきたい。

## 重点目標 3



## 【自己評価の分析・考察および今後の改善策】

## 〈総務・広報部 HP・情報委員会〉

本校保護者を対象とした行事・授業の公開、中学校関係者へのオープンハイスクール、WEBサイトでの情報発信について、概して高い評価を得た(4.3~4.4)。12月1日時点での本校受験希望者が募集定員を上回っていることについては、長年にわたる各部署・学年団、学校全体の教育活動が地域や中学校に理解され、評価されるようになってきたということであろう。

情報発信については、年度当初に全職員にIDを配布した効果も表れて、ブログなどへの投稿が積極的に行えたと評価できる。一方、「開かれた学校づくりの目指す姿」である、地域との連携を深める取組が不足していた。来年度は適切な情報を育友会や学校関係者からも提供いただく体制を検討していきたい。また、自己評価では高い評価を得ているものの、データ分析においては総ID発行者のうち投稿実績があるものが50.9%にとどまっている。更なる利用促進に向けた具体的な取組を検討していきたい。

## 〈学校評価委員会〉

学校評価の担当が2年目となり要領を得てきたので、校内の委員会や外部関係者との調整が円滑に行えるようになった。また、職員に対しても前年の課題を踏まえて今年度の目標を立てることができ、明確な評価につなげることができた。今年度の評価項目は変更になっておらず、重点目標を基準に目標と計画が精選でき、わかりやすく評価できるようになった。このようなことから、前年に比べ「学校評価の改善」に関する評価が高まったと考えられる。